

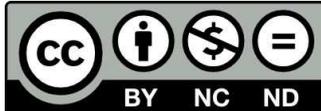
日本IT書紀

206 夜討ち朝駆け

10 迅風篇

卷之二十七 連屬

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第二百六

夜討ち朝駆け

一

ビル・トッテンという「変な外人」については、砂田薫の『起業家ビル・トッテン』という優れた書籍があるので、筆者としては屋上屋を架すことを回避したいと考えている。ただ、話の都合上、書かないわけにはいかない。この人物を抜きに日本のパッケージ・ソフトウェアのことは語れないであろう。

そこで、例えば、

——織田信長、豊臣秀吉、徳川家康について記した書物は山ほどあるではないか。

という、やや詭弁に近い言い訳をしつつ、本書なりの書き方をする。

ビル・トッテンがコンピュータアプリケーションズの大久保茂と初めて会ったくだりで、筆者は「その身長は二メートル六センチ」ということを書いた。背丈は本人がそう答えているのだから、まず間違いあるまい。

とにかく大きい。

何がいちばん驚くかという点、靴のサイズである。親指の先からかかとまで三十六センチというのは、プロレスラーのジャイアント馬場には及ばないが、筆者において日常目にするのができた靴としては最も大きかった。

その長身が歩く。

歩くのは誰でも歩くが、一時期は東京・世田谷の千歳船橋という町にあった自宅から、虎ノ門のオフィスまで、よほどの嵐でもない限り毎日徒歩で往復した。

「たいしたことないですよ。ちょっと大またで歩けば三時間くらい」

同じく大またでも、ビル・トッテンは二メートル六センチ、筆者は一メートル六七センチ。その歩幅は背丈の差と同じ程度、あるいはそれ以上に違う。

「わたしならその一・五倍はかかる。一日中、歩いていなければならぬ」

という点、大きな体をのけぞらせて笑った。ややあつて自宅を京都に移した。

あるときからネクタイを止めて蝶ネクタイになった。ズボンもベルトからサスペンダーに変わった。

「自宅を京都にしたら、きれいでスバルラシイ織物がたくさんあった。それで蝶ネクタイを作った。似合うでし

よ?」

筆者は答えを保留した。

「スバルラシイ」はトッテンにおいては「素晴らしい」の意味である。

そういうエピソードは山ほどある。

筆者以外にも、同じように沢山のエピソードを知っている人が少なからずいる。

初めて会ったときは近視用だったはずの眼鏡が凸レンズに変わっていた。筆者も遠近両用をかけるようになっていく。お互い、それなりに歳を取った。

筆者が取材で都内を動き回るようになった一九八〇年代の前半、東京・西新橋の東京慈恵医科大学附属病院のほど近くに、アシストの本社があった。通りに面して階段が突き出している「西新橋MYビル」という小さな雑居ビルで、周囲の景色は変わったが二〇二三年の今も当時の姿のまま残っている。

記者に対応していたのは、もっぱら石川征彦だった。永妻寿が設立したシステム開発という会社でプログラマーとして勤めているうちトッテンと親しくなった。トッテンはシステム開発に居候状態で、そのオフィスを足場にして都内を動き回っていた。

そうこうするうち「ソフトウェア・プロダクト部」が新

設され、そこに配属された。

社長・永妻は

——場合によっては、ビルを社員にしてソフトウェア・パッケージ事業を始めるかと考えていた。

石川もすっかりその気になっていたもので、七二年三月にトッテンが「株式会社アシスト」を設立すると、発起人の一人として名を連ねた。

当時、トッテンはマスコミに顔を見せなかった。トップセールスで飛び歩いていて、とても取材に応じる時間がない、というのが理由だった。

であれば、会ってみたくなる。

「ビル・トッテンに会わせてほしい」

というと、石川は言った。

「当社が次に扱うプロダクトを当てたら、会わせてあげましょう」

企業の広報にかかわる人はたいいてい、このような無茶な条件を出すことはない。雲をつかむような話で、要するに——面会はお断りします。

というわけだった。

引き下がるのは、いかにも口惜しい。

そこでアメリカのパッケージ市場を調べ、国内のパッ

ーズ市場を調べ、ユーザーのニーズが奈辺にあるか、コンピュータ・メーカーのソフト戦略が何を指向しているかを調べた。

一週間ほどして、石川に

「リレーショナル型データベースでしょうか？」

と言った。

だけでなく「DATACOM/DB」という製品名まで告げた。

「ほう。その根拠は？」

縷々、そう考えた理由を電話に向かって話した。

さらに一週間ほどして、今度は石川から電話が入った。

「明日、いらっしゃい。トッテンが会うといっている」

二

「なぜ、日本にやってきたんですか？」

と尋ねたことがあった。「なぜ」には、

——どのようないきさつで。

——何を目的に。

の二つの意味が含まれている。

彼は組んだ長い足をゆっくり解きながら、ニヤツとした。

「スパイ」

システム・デベロップメント・コーポレーション（SDC）社の市場調査員として初めて羽田空港に降り立ったのは一九六九年の九月、二十八歳のときだった。

カリフォルニア州立大学を出てノース・アメリカン・ロッキウエル社に入り、上司だったエミル・ゲイナーがSDC社にヘッドハンティングされたとき誘われて一緒に移籍した。SDC社に勤めながら大学院に通った。

博士課程にあったとき、大学から海外のアメリカ軍基地で非常勤講師をやらないう話があった。折からSDC社は日本への進出を検討していたので、講師の仕事の合間に日本の市場調査をすることを条件に、交通費、滞在費を会社が負担するという事になった。

「スパイ」と答えたのは、アメリカ軍基地に勤務しながら情報収集を行ったことを、半ば揶揄しているのである。最初の滞在は七〇年二月までの半年間だった。

当時、日本では「MIS」がブームになっていた。

ところが

「その言葉自体、日本で初めて聞いた」という。

「ある人から、これを読むといい、と一冊の本を紹介された。それは「MISはインチキだ」というタイトルだった」

この話はトッテンが多くの人に話している。

もつとも、SDC社の日本事務所が千代田区永田町の全共連ビルの地下にあったとか、日本で最初に彼の面倒を見たのが自動車部品の輸入商社であるインターテックの日沖明という人物だったということは、『起業家ビル・トッテン』を読むまで知らなかった。

この半年間の滞在で、トッテンは日本電気の水野幸男、富士通の中村洋四郎、三菱化成の川崎脩三郎、システム開発の永妻寿、CACの大久保茂、ビーコンの宮台功、明治生命の奥山貞夫、東京放送の北小路轟などと会った。

アメリカの有力なシンクタンクで国家プロジェクトを受託していたランドコーポレーション直系のソフト会社の調査員というだけでなく、二十八歳の若さで南カリフォルニア大学の経済学博士号を取得した明晰な頭脳から繰り出される発想のユニークさが、初対面であったにもかかわらず多くの日本人に強い印象を残した。

トッテンはアメリカに戻るとSDC社の副社長だったチャック・オールダーズに

「日本でソフトウエア・パッケージの事業を始めたい」と申し出た。

「何を売るのかね」

日ごろ、社長のエミル・ガイナーと折り合いが悪かった

オールダーズは、ガイナーが目をかけているこの青年の提案は端から聞くつもりはなかった。

「現在の日本には、インフォマテイクス社のMARK IVとASI社のASISTが適当だと思えます」

「なぜ当社のパッケージではないのかね」

SDC社は軍事技術を転用したデータ管理システムをパッケージとして販売していたから、オールダーズの質問は当然ではあった。

「当社のパッケージは複雑で、難しすぎます」

トッテンは日本で収集した情報を開陳しようとした。だが会見は短時間で終わった。

「承認できないね」

オールダーズは言った。売り言葉に買い言葉だった。

「どうしても承認してくれないなら、自分でやります」

「それなら、キミの進むべきところはあそこしかない」

オールダーズが指差したのは、ドアだった。即刻、会社から出て行け、というのである。

トッテンはむろん、そうした。

その足で向かったのはインフォマテイクス社だった。

こうしてトッテンは再び日本の土を踏むことになった。

すでにインフォマテイクス社とASI社から、口頭ではあったが販売権を与えるという約束を取り付けてあった。

「一九七二年の二月のことでした」
とトッテンは言う。

三

トッテンが立川基地の非常勤講師の任を離れて再び来日するまで丸一年の間に、日本の状況は大きく変わっていた。

I B M社がシステム／370と併せてハードウェアとソフトウェアのアンバンドリングを打ち出し、加えて佐藤ニクソン会談でコンピュータの資本・輸入自由化が本決まりとなった。これを受けて通産省と大蔵省は、輸入ソフトウェアの五万ドル枠を撤廃した。

結果として日本で多くの外国製パッケージが販売されるようになっていた。

一本五万ドル以上のソフトウェア・パッケージで、最初に輸入が認可されたのはアメリカのコムレス社が開発した「SCERT」という製品だった。

コンピュータの性能を測定するツールで、代理店は日本能率協会とJ A Mシステムズだった。通産省の平松守彦は規制緩和第一号の認可を与えることで松平和也の労に報いたと見ている。

このほかでは東京システム技研がアメリカのブル&バ

ベッジ社と提携してシステム・パフォーマンス分析ツール「SMS」の販売を始めていた。東京システム技研というのは東京放送の子会社で電子機器輸入販売を主業務とする東京エレクトロンのソフト部門が分離独立したのであって、ここに北小路轟が常務として出向していた。

ともあれ、再来日したトッテンは永妻の配慮で、渋谷の道玄坂にあったシステム開発に机を持つことができた。だけでなく、永妻は顧問弁護士を紹介し、税理士を紹介し、入居するビルを探し、自社の社員まで出向させ、資本金すら出し、自ら形式上、アシストの代表取締役に就任した。永妻が見せた懇切な対応は、何が理由だったのか。

なるほど、ソフトウェア・パッケージという新しいビジネス領域を開拓することに意欲をそそられたのである。

「外国人が社長では、ユーザーとなる企業も金融機関が信用すまい」

というのが理由だったというが、おそらくビル・トッテンという青年に惚れ込んだとしか言いようがない。

もう一人、この青年に惚れ込んだ人物がいた。

その人は水野武という。

平和相互銀行の本店支店長を務め、トッテンと知り合ったときにはすでに退職して関連会社の役員だった。その三女がトッテンのプロポーズを受けた。義父という関係では

あったが、アシストが設立されて二年目に会長に就任すると、自分の自宅を抵当に入れて銀行から資金を借りた。

「ちなみに言うと、二〇〇五年現在、同社の取締役の職にあった大村恵子は、水野武の次女、すなわちトッテンから見ると義理の姉に当たる。

こう書くとアシストは「トッテン+水野ファミリー」の閉鎖的な経営であるように思われるかもしれないが、実態はそうではなかった。

例えば水野武は、会長とはいえほとんど無給だったし、大村がアシストで働くようになったのは、タイピスト兼秘書の女性が一週間の休暇を取ったとき、ピンチヒッターで手伝ったのがきっかけだった。彼女はそれから以後もほとんど無給で仕事を手伝った。

一家をあげて惚れ込んだ、ということもできる。

——「背の高い変な外人」がパッケージを売り歩いていく。という情報を小耳に挟んだことを、平松守彦はいまでも覚えていた。

平松がJMAシステムズ（JMAS）の松平和也、コンピュータアプリケーションズの大久保茂などに確認すると、

「ああ、ビル・トッテン」

という答えが一様に返ってきた。

「少しは日本語が話せるかね」

「いや、英語だけです」

それで平松はトッテンと会うことがなかった。

平松は英語が苦手、というより英語で話すのが面倒なのだ。英語力が相当のものであることは、一九六〇年にコンピュータの特許使用をめぐるIBMのバーゲンシユトック法務担当副社長とサシでやりあったことからはっきりしている。

「いよいよ日本もそういう時代になったか、という感慨はあった。まさに国際化時代の到来を象徴しているようだった。コンピュータの自由化は避けて通れない、という覚悟が一段と強くなった。それともう一つは、ソフトウェア製品が売れるということだった。これは何としても、国産パッケージを作らにゃいかん、ソフト業もそうならなきゃいかんと思った」

この思いが情報処理振興事業協会（IPA）を通じた汎用プログラム委託開発事業につながっていく。

「汎用プログラム」とは、つまりパッケージである。IPAがテーマを定め、その開発を民間に委託するというのが形式だが、実際は民間企業が開発中もしくは企画中のソフトウェア・パッケージを助成する制度で、この制度を通

じていくつかのベストセラー・パッケージが世に出た。

協同システム開発（JSD）が開発した画像処理プログラム「SPIDER」、東京データセンターが開発・販売する「MRDB」などが代表であろう。

アシストの創業期、トッテンが見込んだほどパッケージは売れなかった。というより、二か月の間は全く収入がなかった。

システム開発のプログラマーでアシストに向向した石川征彦、夏川昭夫、渋谷周一、佐藤徹二は、毎晩九時か十時まで仕事をした。石川はユーザー教育を担当するかわら大成建設が保有するIBMシステム/360モデル50を使って、「ASIST」のインストール手順、機能、性能、バグの有無を確認した。コンピュータが空いている深夜から早朝にかけて利用するしかなかった。

「徹夜明けで会社に来ると、ソファの上で夏川さんが眠りかけていたこともしばしばあった」

と述懐している。

小さな台所でお湯を沸かし、それで体を拭いて新しい一日の仕事に取り掛かった。

トッテンと佐藤は電話にかじりついて、アポイントを取りまくった。

「十分でいいですからお時間をください」

会ってもらわないことには、営業にならない。

明治生命の情報システム部長を務め、日本で数少ないCIOの一人となった奥山貞夫は言う。

「あのころトッテンさんは神出鬼没だね。ブン屋さんがやる夜打ち朝駆けをよくやってました。朝と夜、会社の前でジッと待ってるんですね。そうやって目当ての人と会う機会を作っていた。すごい営業マンだな、と思ったものです」

最初のユーザーはシエル石油だった。

この会社に対して、トッテンはアシストという会社を設立する前——システム開発に席を置いていたときから——コンタクトを取っていた。

七二年の五月、シエル石油は「ASIST」の購入契約書にサインした。トッテンの窓口となったのは情報システム課の課長・藤田幸久（のち三和コムテック常務）である。

これ以後、「ASIST」はポチポチと売れたが、契約数に比例してユーザー教育やマニュアルの整備、開発手法の最適化など手間がかかるようになったので、利益はほとんど出なかった。

アシストが飛躍のチャンスをつかんだのは七三年、パンソフィック・システムズ社と結んだプログラム・ライブラ

リー管理システム「PANVALET」である。

百八万円という価格と、インストールするだけでプログラム・ライブラリーが作成できる簡易性が受けた。このパッケージは七八年までの五年間で百ユーザーを獲得するヒットとなった。

次いで七六年に投入した、やはりパンソフィック・システムズ社の簡易言語「Easytrieve」が爆発的に売れた。二年半で売れたのは五十本だった。百本売ればヒット、といわれていた時代である。

取材していた筆者たちも、十五―二十ユーザーであれば可もなし不可もなし、五十ユーザーであればまず成功、百ユーザーなら大ヒットということ、常に考えていた。大型コンピュータのユーザーは国内に二千社程度だったし、ソフトウエア・パッケージに理解を示すユーザーは限られていた。

七八年三月末現在、国内におけるパッケージ導入ユーザー数の上位は次のようだった。

ザ・ライブラリアン	160 (DEK)
PANVALET	100 (アシスト)
AUTOFLOW II	55 (DEK)
Easytrieve	50 (アシスト)

MARK IV 41 (CAC)

TOTAL 24 (シンコム・ジャパン)

テストマネージャ 23 (JMAS)

ASII-S-T 20 (アシスト)

SECRET 19 (JMAS)

SMS/PIPE 15 (東京システム技研)

PRO-T-EST 14 (SRA)

ADABAS 13 (ソフトウエアAG)

このうち「TOTAL」も、当初はアシストが扱っていた。ビル・トッテンは日本で最初に成功した外国人起業家だった。

※略称表記の企業は以下のようである。

DEK	データエレクトロニクス
CAC	コンピュータアプリケーションズ
JMAS	JMASシステムズ
SRA	ソフトウエア・リサーチ・アソシエイツ

~~~~~ 補注 ~~~~~

**DATA COM / DB** このソフトウェアをアシストは「IDEAL」という名前に変えて発売した。アシストがのちに扱った **DBMS** 製品としては、**ORACLE**、**DB4** などがある。

**宮台 功** みやだい いさお・ビジネスコンサルタントからソフトウェア **AG・オブ・ファアイースト**に移り、運用管理系パッケージの統括責任者となった。のち **BSP** を設立して社長、会長となり二〇〇三年に退いた。

**ブル&バベッジ社** 性能管理、パフォーマンス管理、キャパシティ管理と呼ばれる分野のソフトウェア製品を開発・販売していた。のち **BMCS** ソフトウェア社に買収された。社名はイギリスの **ジョージ・ブール** (George Boole / 1815 ~ 1864) と **チャールズ・バベッジ** (Charles Babbage / 1792 ~ 1870) に由来している。

**北小路轟** きたこうじ のぶ / 1924 ~ .. 東京都に生まれ東京目黒にあった海軍研究所でレーダーのパルス研究に従事した。一九四八年東京工業大学電気工学部を出て電波通信社(のちの電通)に入りラジオ番組編成を担当した。五五年東京放送に移り、コンピュータ・システムの導入に際してシステム管理部長、七一年子会社「東京システム技研」設立と同時に常務、のち社長、会長となった。ソフトウェア産業振興協会、情報サービス産業協会の副会長、国際担当理事として活躍した。

**SLIDER** Subroutine Package for Image Enhancement and Rev/cognition : 協同システム開発が開発した画像処理用のサブ

ーチン・ライブラリーで、最初のバージョンは研究者や技術者向けに公開され、約一千ライセンスが提供された。その補強版「**SLIDER II**」は八六年に発売され約二百ライセンスを超えるベストセラーとなった。

**MRDB** 情報処理振興事業協会の特定プログラム委託開発事業の一として **TDC** (旧・東京データセンター) が開発した。純国産のリレーショナル型データベース管理システムとして中・小型汎用コンピュータ、オフコン、パソコンなどで利用され、ベストセラーとなった。

# 日本IT書紀 206 夜討ち朝駆け

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会  
<http://www.ossaj.org/>  
[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。